

「病人を癒やし、巡回して宣教する」

2021年10月22日

夕方になって日が沈むと、人々は病人や悪霊に取りつかれた者を皆、御もとに連れて来た。町中の人々が戸口に集まった。イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちを癒やし、多くの悪霊を追い出して、悪霊にももの言うことをお許しにならなかった。悪霊がイエスを知っていたからである。(マルコ福音書1章32節～34節)

イエスは言われた。「近くのほかの町や村に行こう。そこでも、私は宣教する。私はそのために出て来たのである。」そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。(マルコ福音書1章38節～39節)

主イエスは会堂を出ると、ペトロとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。すると、ペトロの姑が熱を出して寝ていた。姑がいたことはペトロには妻がいたということである。パウロは、「私たちには、他の使徒や主の兄弟たちやケファ（ペトロ）のように、信者である妻を連れて歩く権利がないのですか（Iコリント9:5）」と書いている。当時は、男性は二十歳くらいで結婚していたから、妻があったのは当然である。ペトロは主イエスの召し出しを受けた時、網を捨てて従ったので、職業も家族も捨てたようだが、彼の妻は、主イエスの復活後、初代エルサレム教会に連なり、ペトロの宣教活動に同行し、支える働きをしていた。ペトロは、主イエスより少し年上と想像されている。聖画に描かれたペトロは、どの聖画も老人であるが、実際は、活力に満ちた壮年であった。

主イエスは、熱を出していた姑の傍に行き、手を取って起こされると熱が引いた。彼女は、来客一同に仕えた。もてなしをしたのであろう。夕方になって日が沈むと、人々は病人を癒やし、悪霊を追放する主イエスの噂を聞いて、病人や悪霊に憑かれた者を皆、御許に連れて来た。町中の人々が押し寄せ、戸口に集まって来た。主イエスは、大勢の病人を癒やされた。また、悪霊を追い出し、もの言うことを許されなかった。悪霊は主イエスが「神の聖者」であることを知っていたので、口を封じられたのである。主イエスの病人の癒やしと悪霊追放を、「治療師」の業と見なし、理性的に説明しようとする説もあるが、聖書は理性的に納得できることを求めてはいない。著者マルコは、霊的な意味において、主イエスは神の子として、神の力を付与された姿を伝えているのである。奇跡は事実か否かを問うことでなく、主イエスによって救いを体験した者は、わが身に起こった事柄として受け入れることができる。私自身、「生きることは空しい」という思いに囚われていたが、主イエスの十字架に、罪の赦し、「生きてよい」との是認宣言を聞いて、解放された。また、生きる勇気によって病気を癒されてきた。

主イエスは朝早く起きて、寂しい所に行き、一人になって祈っておられた。主イエスは祈りの人で、激しい宣教生活を支えたのは祈りであった。弟子たちは主イエスの後を追って、「みんなが捜しています」と言うと、「近くのほかの町や村に行こう。そこでも、私は宣教する。私はそのために出て来たのである」と答えられた。そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、病を癒され、悪霊を追い出された。

主イエスの宣教は、病を負い、苦しみ、「罪人」と烙印され、排除されていた人々を人間に回復するもので、それは、ファリサイ派の人々が営々として築き上げてきた律法による差別管理体制を根底から覆すものであった。主イエスの回りには、苦しむガリラヤの民衆が群がった。ファリサイ派の人々にとって、主イエスは由々しき存在となっていった。